

国文学・俳句

い も と の う い ち
井 本 農 一

周南市
(1913～1998)



【著作】

評論集『俳文芸の論』（昭和28・明治書院）
随筆集『流水抄』（昭和55・角川書店）
句集『蓮の母 井本農一句集』（平成11・永田書房）ほか

【閲覧情報】

平成12年度から、周南市立新南陽図書館に、青木健作・井本農一父子文庫を設置。広く市民に紹介している。

国文学者・評論家・俳人の井本農一は、大正二年（一九一三）千葉県成田町（現・成田市）に小説家青木健作・静子の長男として生まれる。父健作は当時町内の成田中学校に勤め、「虻」「お絹」などの作品を発表。漱石から優れた新進作家として称賛される。大正四年（一九一五）父の転勤に伴い上京。豊島師範付属小学校、成蹊高等学校（尋常科・高等科）に入学、東京帝国大学文学部国文学科卒業と、恵まれた教育環境の中で育まれました。

東大卒業後はしばらく文部省に勤務していたが、昭和十八年（一九四三）第二次世界大戦が激しくなった頃、山口高等学校（旧制）教授・山口女子専門学校講師として故郷（本籍・周南市富田）に近い山口へ赴任する。しかし昭和二十年（一九四五）終戦とともに帰京。十月に東京女子高等師範学校（現・お茶の水女子大学）教授になる。彼は以後、当大学に三十三年余在職し、その多数の著作・論文等は学界に貴重な貢献をすることになる。『国文』四十九号（お茶の水女子大学国語国文学会昭53）の「井本農一先生 執筆目録」によれば、在職中の著書は五十三冊。『芭蕉の文学の研究』（文部大臣賞受賞）などの芭蕉関係の本が多い中に、『俳文芸の論』という一冊の俳論集がある。

この本は戦後まもない頃、「俳句の本質はイロニーニッシュな対象の把握の仕方にある」と問題提起をしたもので、イロニーは皮肉、反語、風刺を意味する。著者はこのことを、中村草田男の「寒の暁ツイン／＼と子の寝息」の句を引用して、「ツインツインはこの句の焦点で、これこそ私の言うイロニーニッシュなものである。凍てつくような凛烈な寒気、自然の脅威、これに対する子供の健康な、人間的な、安らかな寝息、その対立を捉えたところにこの句の俳句性がある」と解説している。この問題提起は当時の俳壇に大きな反響を呼んだ。

お茶の水女子大学退官後は実践女子大学学長の要職に就くが、その後は好きな句作に励んだり、時には孤独な旅を楽しんだ。

イルカの曲芸あはれと見れば青嵐

農一

（文・桑原伸一）



『俳文芸の論』



青木健作・井本農一紹介コーナー
（周南市立新南陽図書館）

井本農一 年譜

（提供・桑原伸一）

大正2（一九一三）年	
大正4（一九一五）年	二歳
大正8（一九一九）年	六歳
昭和4（一九二九）年	一六歳
昭和11（一九三六）年	二三歳
昭和16（一九四二）年	二八歳
昭和18（一九四三）年	三〇歳
昭和19（一九四四）年	三一歳
昭和20（一九四五）年	三二歳
昭和21（一九四六）年	三三歳
昭和23（一九四八）年	三五歳
昭和26（一九五二）年	三八歳
昭和28（一九五三）年	四〇歳
昭和31（一九五六年）	四三歳
昭和36（一九六二年）	四八歳
昭和37（一九六二年）	四九歳
昭和42（一九六七）年	五四歳
昭和52（一九七七）年	六四歳
昭和53（一九七八）年	六五歳
昭和55（一九八〇）年	六七歳
昭和56（一九八二年）	六八歳
昭和59（一九八四年）	七一歳
昭和63（一九八八年）	七五歳
平成3（一九九二年）	七八歳
平成5（一九九三年）	八〇歳
平成6（一九九四年）	八一歳
平成10（一九九八年）	八五歳
（没後）	
平成11（一九九九年）	

学窓にゐる中は、連歌・俳諧を専攻しようとは決めてゐたが、卒業してみると或は小説に興味に向き、或は文学理論が面白くなり、又中世の小歌や良寛を調べたくなるなど、転々として興味が動いて行つてゐるのが、偽らない私の過去である。しかし、さういふ転々の中でも俳諧に對しては、その文字的性質を明らかにしたいものだと言に念願しつづけてゐたといつてよいであらう。さういふ念願から発した私の連歌・俳諧に関する論考の中、考証や注釈的研究などは除いて、その文学的性質を明らかにしようとしたものを主にして本書は成つてゐる。

（『俳文芸の論』より）

ビルを出て遅日の街にまぎれ入る
荒涼たる余生よ立ち向かふ単騎

（句集『遅日の街』昭和52年刊）

うたれ鴨まだぬくみあり風が吹く
水仙をかばひ雑踏に揉まれゐる

（句集『微茫』平成3年刊）

土手枯れて川心なく流れけり
逝く時はあの世見ゆらんか蓮の母

（句集『蓮の母』平成11年刊）

千葉県成田町（現・成田市）に作家青木健作・静子の長男として生まれる。本籍は山口県都濃郡富田村（現・周南市）。両親は後に同村の井本八之丞家を継ぎ、井本と改姓。幼い頃から両親に伴われ、ふるさと周南の地を訪ねる。

父健作が日本大学中学校に転勤のため、東京府小石川区大塚坂下町に住む。

東京府立豊島師範学校附属小学校に入学。

成蹊高等学校尋常科を経て高等科に入学。

東京帝国大学文学部国文学科卒業。

文部省に勤務。『日本文学史攷』を修文館から発刊。松本詮子と結婚。東京都杉並区上荻窪に在住。

旧制山口高等学校教授、山口女子専門学校講師。当初山口市後河原に下宿、後に防府市に家族を呼び寄せ居住。

『宗祇論』を三省堂から出版。

東京女子高等師範学校教授に転じ、ついでお茶の水女子大学教授。東京都下百草園に在住。

『詩人良寛』を美和書房から出版。

東京都新宿区下落合の両親宅に同居。父健作が起した「無花果会」（俳句結社）に参加し、昭和39年健作亡き後はその責任者となる。

『奥の細道新解』を明治書院から出版。

『俳文芸の論』を明治書院から出版。その中で提唱した俳句イロニー説（俳句の俳句たる所以の本質は、そのイロニーニッシュな対象の把握の仕方にある。）は、世の俳句作家に大きな反響を呼ぶ。

『奥の細道をたどる』（上・下）を角川書店から出版。

『蕉風を中心とした俳諧史の問題的研究』で文学博士の学位を受ける。（東京大学）

1月7日、母静子死去。（七十二歳）

東京都中野区上鷲宮に転居。

1月29日、妻詮子急死。

追悼 今日からは余生と思ひ妻葬る

第一句集『遅日の街』を永田書房から出版。

『芭蕉の文学の研究』で文部大臣賞受賞。お茶の水女子大学退官。聖心女子大学教授。

随筆集『流水抄』を角川書店から出版。小津敏子と再婚。

実践女子大学教授。実践女子大学学長に就任。（昭和63年退職）

勲二等瑞宝章受章。

第二句集『微茫』を永田書房から出版。

第五回現代俳句協会大賞を受賞。

新南陽市（現・周南市）から市民荣誉賞受賞。『季語淡彩』を小学館から出版。

10月10日死去。叙正四位。東京都小平霊園に両親、妻とともに眠る。

10月、念願の第三句集『蓮の母 井本農一句集』を永田書房から出版。